

## カメラマン(建築写真家)そしてカワラマン(瓦職人)としての建築界への貢献

山田脩二 殿 [(株) 山田脩二・淡路かわら房主宰]

### 選定理由

山田脩二氏は、写真家としてデビューし、都市・建築・芸術の総合雑誌『SD』(鹿島出版会)創刊に参画して以降、建築写真家として第一線で活躍してきた。初期の代表的な仕事としては、「パレスサイドビル」(林昌二、1966年)、「慶松幼稚園」(原広司、1968年)、「未完の家」(篠原一男、1970年)、「白井晟一自邸」(1970年)などが知られる。

しかし、その活躍はいわゆる「建築写真」の枠内にとどまらない。ありがちな「建築」のみが切り取られる「写真」ではなく、「生活」のなかでの「建築」、「風景」のなかでの「建築」、あるいは「時間」のなかで根付いていく「建築」の姿に視点が置かれてきた。その写真表現は、建築を広く文化的基礎の上に位置づけるものとして、高く評価されてきた。

例えば、1971年まで約300回にわたって連載した『毎日グラフ』における「現代の造形美」の写真や、『小笠原流挿花』に連載された伊藤ていじの「民家は生きてきた」の写真などがある。日本各地に生きてきた民家にも注がれた表現者としての眼識は常に一貫しており、その後の「カメラマンからカワラマンへ」という転身の動機は、当初から氏のなかで醸成されてきたものと考えられる。

写真家としての代表作『山田脩二／日本村1969-79』(三省堂、1979年)は、日本文化そのものを浮き彫りにするもので、一連の仕事のひとつの到達点を示している。日本の景観が壊れつつあることへの危機感を背景に、各地を巡りながら実態を記録し続けることで警鐘を鳴らした。ここに風景のなかで建築を見る確固たる姿勢がみて取れる。

現代建築の方向性に関する危惧と批判的な確信は、やがて写真を撮り、紙に焼くという写真家としての営みから、実際に土や木を焼いて建築やまちをつくる側の仕事に身を投じるといふ、一見大きな転身を導くこととなった。瓦工場の臨時見習いになったのは1982年、氏が42歳のときである。2年間の修行を経て、淡路瓦師(カワラマン)として自立し(「山田脩二・淡路かわら房」設立主宰)、さまざまな建築家や瓦製造者との共同作業を開始する。その初期の重要作品として、「伊豆の長八美術館」(石山修武、1984年)、「シルバーハット」(伊東豊雄、1984年)、「用賀プロムナード：いらかみち」(象設計集団+計画技術研究所、1986年)などがある。

その直後から多くの建築家に多大な影響を与えることになり、「瓦による創作活動」に対し「吉田五十八賞特別賞」(1991年)をはじめ、数々の受賞がある。また、1991年に鬼瓦職人を組織する「日本鬼師の会」を設立し、『鬼・景観-現代建築と鬼瓦』展を開催するなど、瓦職人の職能の活性化に寄与した。活動拠点である淡路という地域へのこだわりも一貫しており、「淡路夢舞台国際会議場」(安藤忠雄、1999年)での淡路瓦と敷瓦や、自ら制作にあたり「第26回井植文化賞」(2002年)を受賞した「青海波ピラミッド(緑の道しるべ・覚公園モニュメント)」がある。

以上の写真家(カメラマン)および瓦職人(カワラマン)としての仕事に伴う展覧会・執筆活動は膨大で、代表的著作としては、『カメラマンからカワラマンへ』(1995年、筑摩書房)がある。また、活動業績の総体に対し、「第26回日本文化デザイン大賞」(2003年)が贈られた。さらに、2006年にはそれらを集大成する『個展：山田脩二の軌跡-写真、瓦、炭...』(兵庫県立美術館)が開催された。

このように、同氏の仕事は日本建築界にとって非常に貴重なものである。とりわけ、地域における建築のあり方が問われる今、氏の先見性は将来にわたって価値を持つものであり、日本建築学会がこうした業績に対して文化賞をもって称えることは誠に時宜を得たものと確信できる。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。

### 受賞所感

若いころから全国津々浦々を粋狂で酔狂な旅を続けている途中で、日本建築学会文化賞をいただき感謝・感激・感動です。

芸術や文化、建築や写真、瓦や炭など自分勝手に気にかけてながらその周辺を寄り道しながら、旅の途中の今日このごろです。

私が、日々、明け暮れしているこの国には、芸術・学術・技術などを地道に寡黙にコツコツと精進を重ねる真摯な、この道一筋の生き様、姿、業績が高い評価を受けて尊敬・表彰される風潮があります。が、この道は、さ迷いながら三筋四筋、見えたり見えなかったり……も結構、と、用事のない雑用の旅を繰り返しています。

二十代のはじめごろ、「オレの人生、焼き入れ続け。二十代は写真・デザインの雑仕事の経験。三十代は独自のスタイルが漂う写真を焼き込み、四十代は粘土で瓦や土管をドカーンと焼き、五十代は雑木林に入って炭焼き現場に。六十代は老化したわずかな気力・体力に風前の残り火を燃やし、写真も粘土も木も焼きシミから炭まで焼いて灰になってハイ、サヨウナラ。アレ、焼きと酔いが回ったゾ」と。

冗談と本気と駄洒落を織り混ぜて一人、悦に入り大言壮語。

酩酊と酩酊の終わりのない道草だらけの旅の道中、日本建築学会文化賞を誇りに次のステージに向かって今しばらくの迷走です。

やまだ・しゅうじ

1939年生まれ/桑沢デザイン研究所リビングデザイン科修了後、凸版印刷入社、1962年フリーカメラマンとなる/20年間フォト・グラファーとして、主に建築・美術など造形的な写真を撮り続ける/1982年職業写真家に「終符宣言」をし、淡路島の地場産業、瓦産地集落・津井で粘土瓦の製造に従事/1984年フリー瓦(カワラ)マンとなる/1991年吉田五十八賞(特別賞)受賞ほか/著書に『カメラマンからカワラマンへ』ほか

